雑誌王・野間清治が創刊した新聞附録を完全復刻！

昭和戦前期報知新聞附録集成（全6回配本）

『日曜報知』復刻版（全4回配本）

［解題］ 佐藤卓己（京都大学大学院教育学研究科教授）

大正から昭和にかけて、マスメディアの形成が飛躍的に進んだ。この時期、報知新聞社の社長だった野間清治は、定期購読者を定着させるためのツールとして、主婦や子ども向けの別冊家庭雑誌の創刊を企図し、報知新聞の附録として発行した。

『日曜報知』は1930（昭和5）年7月創刊、当初は週刊であったが、1933年8月以降は第1、第3日曜日の発行となり、1937年2月までに全262号が発行された。

執筆陣には、吉屋信子、白井喬二、恩地孝四郎、木村荘八、岡本綺堂、横溝正史、直木三十五、巌谷小波、西條八十、佐佐木信綱、菊池寛、野口雨情、徳川夢声、長谷川伸、清沢洌、子母澤寛、村松梢風、サトウ・ハチローら、当代一流の作家が並んだ。

一九三〇年代日本のマスメディア史、文学史をたどる上で不可欠の資料であり、学生から研究者まで、多方面で活用が可能な研究リソースとなる。

［体裁］ B5判上製・総11750頁・全22巻
［予価］ 各回揃本体210,000円＋税 ※各回とも分売不可

第1回配本 ISBN978-4-7601-4799-1
第2回配本 ISBN978-4-7601-4846-2
第3回配本 ISBN978-4-7601-4851-6
第4回配本 ISBN978-4-7601-4856-1

【本資料の特色】

- 1930年から1937年にかけて発行された報知新聞附録『日曜報知』全262号を全4回にわたって復刻。1930年代大衆文化の研究に新境地が拓かれる。
- 報知新聞社史関連資料が充実。報知新聞社史の空白を埋め、戦前期日本のメディア状況を精査するうえでも貴重な資料。
- 報知新聞の部数拡張のために創刊され、日曜附録合戦の口火を切った附録雑誌。「キング」化する報知新聞を象徴する雑誌として、今後のメディア史研究には不可欠となる。
- 現代小説、時代小説の二大連載を中心に、探偵小説やユーモア小説、実用知識、詰め将棋など、幅広いジャンルにわたり当代随一の著名人が多数寄稿。昭和戦前期における文学や漫画の最前線に触れることができる。
- 第1回配本の別冊にて第一人者による解題を、第4回配本の別冊にて『日曜報知』総目次を掲載する。

柏書房 〒113-0033 東京都文京区本郷2-15-13 Tel 03-3830-1891 Fax 03-3830-5337

本資料集を推薦します

（五十音順・敬称略）

一九三〇年代社会・文化の無二の資料

有山輝雄（メディア史研究者、近代日本メディア史）

『報知新聞』は一八七二年の創刊以来一貫して最有力新聞の一つであったにもかかわらず、これまで軽視されてきた。自由民権運動で指導的役割を果たしたし、その後も編集面・経営面での斬新な企画によって東京新聞界の先導的新聞であった。今回復刻される『日曜報知』も編集・経営両面の大胆な新機軸である。同紙は経営的下降線をたどっている時期だが、積極的な紙面作りによって異彩をはなっている。この一九三〇年代社会・文化の無二の資料の復刻を喜び、『報知新聞』研究の活発化を待望する。

人々の習慣に変容を加えた一週間ごとの定期便

紅野謙介（日本大学文理学部教授、日本近代文学）

人々を読者のレベルだけでなく、消費者のレベルに変えていくにはどうしたらいいか。消費社会の到来を前に採用された手法がメディアの「附録」という発想だった。そこに盛り込まれたグラビア、漫画、読み物、小説、座談会などが時代の最先端のキイワードを知らしめ、人々のあこがれや欲望を刺激し、趣味や教養、思考の回路に働きかけようとしたのである。『日曜報知』はその筆頭だった。一週間ごとの定期便がどのように私たちの「習慣」に変容を加えたのか、その痕跡をたどってみたい。

戦時期の大衆心理の実像を掘り起こす

竹内洋（関西大学東京センター長、教育社会学）

史料の発掘で定評ある出版社がまたまたやってくれた。本体の『報知新聞』を読んだことがある人は多くても、付録の『日曜報知』になると、読んだ人は稀だろう。満州事変前後から日中戦争直前までの「十五年戦争」や「非常時」といわれる時代の史料だが、大衆が日常生活の平穏さを楽しんでいる意外性に驚く。戦時期の大衆心理の実像を掘り起こすためのこの上ない史料である。史料解読巧者佐藤卓己氏の解題にはそのヒントがつまっている。

おすすめします メディア史、社会学、女性学、児童研究、文学研究、近代史、教育史、大学図書館・公共図書館

昭和戦前期報知新聞附録集成 配本計画

『日曜報知』
第1回配本 第1号～第82号（1930年7月27日～1931年12月20日） （全7巻）【2017年4月刊行予定】
第2回配本 第83号～第135号（1932年1月1日～1932年12月25日） （全4巻）【2017年10月刊行予定】
第3回配本 第136号～第185号（1933年1月1日～1933年12月17日） （全4巻）【2018年4月刊行予定】
第4回配本 第186号～第262号（1934年1月1日～1937年2月21日） （全7巻）【2018年10月刊行予定】

『婦人子供報知』
第5回配本 第1号～第67号（1931年3月11日～1933年12月24日） （全6巻）【2019年4月刊行予定】
第6回配本 第68号～第143号（1934年1月14日～1937年2月28日） （全6巻）【2019年10月刊行予定】

柏書房の関係資料

都新聞 昭和期 復刻版 全34回配本

中日新聞社 監修
A3判 各配本につき揃定価（本体250,000円＋税） ※分売不可
激動の昭和戦前期において、不偏不党・至公至平の立場を貫き、社会・民衆すべての要求に応えんとした『都新聞』。独特な紙面作りで、演劇・芸能・花柳・映画・ラジオ・文芸・家庭欄記事の切れ味は他紙を圧倒。戦前を代表する庶民派新聞！

ホーム・ライフ 復刻版 全17巻 全2回配本

日本経済新聞 監修
B4判 各配本につき揃定価（本体285,000円＋税） ※分売不可
大阪毎日新聞社と東京日日新聞社が刊行した幻の高級グラフ雑誌『ホーム・ライフ』を復刻。創刊は1935年8月、終刊は1940年12月。皇族・華族をはじめ、当時の上流階級を被写体に、カメラは知られざる昭和の姿を映し出す。

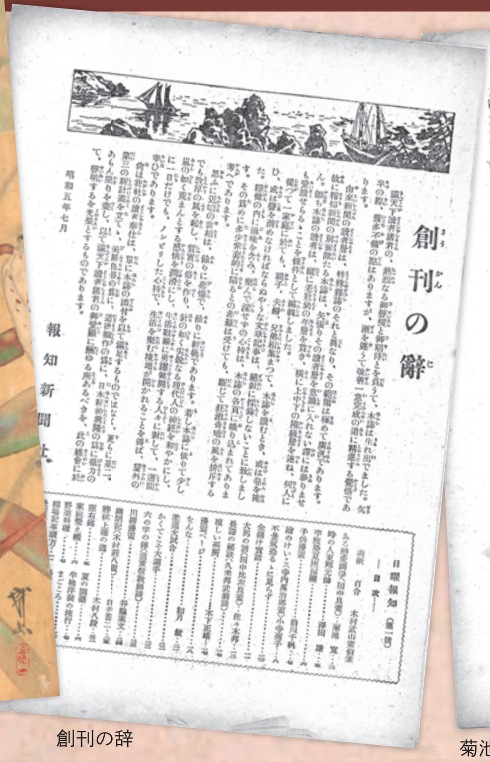
雑誌『新聞と社会』復刻版 全10巻

佐藤卓己 編・解説
B5判 揃定価（本体250,000円＋税） ※分売不可
蓑田胸喜が主催した激烈な帝大批判雑誌『原理日本』。その別働隊とも言い得る新聞批判雑誌『新聞と社会』を復刻。大新聞社のゴシップや内部情報も満載の、右翼版「噂の真相」の全貌が、いま明らかになる！ 詳細索引付。

2017.4

満洲事変前から日中戦争前まで、昭和戦前期日本の大衆文化状況を照射する貴重な資料

創刊号表紙



創刊の辞

菊池寛「ある恋愛闘争」
（第3号、1930年8月10日）

村岡花子「幸運の城」（第10号、1930年9月21日）

「全国美人大画報」
（第26号、1930年12月17日）

臨時増刊「家庭コドモ号」（第36号、1930年10月12日）

「女性尖端職業座談会」
（第56号、1931年6月21日）

板垣守正「男装の革命姫」
（第172号、1933年9月10日）

「東北凶作地を行く」
（第208号、1934年11月18日）

グラビア「待たれる父君の帰国――松岡全権のお留守宅」
（第145号、1933年3月5日）

グラビア「満洲の紙幣と貨幣」（第78号、1931年10月22日）

『日曜報知』復刻版の全巻構成

〈第1回配本〉
第1巻　第1号〜第16号（1930年7月27日〜10月30日）
第2巻　第17号〜第27号（1930年11月2日〜12月21日）
第3巻　第28号〜第33号（1931年1月1日〜1月25日）
第4巻　第34号〜第44号（1931年2月1日〜3月29日）
第5巻　第45号〜第53号（1931年4月5日〜5月31日）
第6巻　第54号〜第70号（1931年6月7日〜9月27日）
第7巻　第71号〜第82号（1931年10月4日〜12月20日）

〈第2回配本〉
第8巻　第83号〜第88号（1932年1月1日〜1月31日）
第9巻　第89号〜第105号（1932年2月7日〜5月29日）
第10巻　第106号〜第122号（1932年6月5日〜9月25日）
第11巻　第123号〜第135号（1932年10月2日〜12月25日）

〈第3回配本〉
第12巻　第136号〜第140号（1933年1月1日〜1月29日）
第13巻　第141号〜第157号（1933年2月5日〜5月28日）
第14巻　第158号〜第174号（1933年6月4日〜9月24日）
第15巻　第175号〜第185号（1933年10月1日〜12月17日）

〈第4回配本〉
第16巻　第186号〜第198号（1934年1月1日〜6月17日）
第17巻　第199号〜第210号（1934年7月1日〜12月2日）
第18巻　第211号〜第216号（1935年1月1日〜3月17日）
第19巻　第217号〜第228号（1935年4月7日〜9月15日）
第20巻　第229号〜第240号（1935年10月6日〜1936年3月15日）
第21巻　第241号〜第252号（1936年4月5日〜9月20日）
第22巻　第253号〜第262号（1936年10月4日〜1937年2月21日）

小野佐世男「人生これ試験」
（第240号、1936年3月15日）

田鶴浜弘「伯林オリムピック大会展望」
（第244号、1936年5月17日）

宮地嘉六「処女は行く」
（第247号、1936年7月5日）

報知新聞史の空白を埋め、1930年代日本の大衆文化、雑誌研究に新境地を拓く